

続・家族理解入門

家族の構造理解・応用編

団士郎

最終回のテーマは「親密関係間の暴力」。これを家族の構造的要素の中のパワーの中に位置づける。親密さを前提とした上での暴力には、背景に依存や甘えが漂っている。原則的に言えば、一過性ではない一方的な加害行動が断続的に繰り返される。これは、突発的な加害/被害事件や、暴力事件とは違っている。ネガティブとは言い切れない関係の中で暴力が使われる。繰り返されてしまうのは暴力がと言うより、関係が持続継続されるからである。原則的に容認すべきモノではないし、そんな対応がエスカレート of 誘因になるから、甘いことを言っていてはならない。「家族間」暴力より、親密関係間暴力と呼ぶのは、恋人同士のような関係にも同様な事が多く見られるからだ。婚姻のように制度的拘束があると思ってしまったところのDVではなく、親密関係以外に拘束はないはずのところ、デートDVと呼ばれる関係が多々見られる。

関係であるから暴力を含まない関係に修復することは可能だ。元々存在したものではなく、関係経過の中で形成されてきたものであるから再構築は可能だ。もっと言えば、そんな関係に入り込んでいかない知恵を、相互関係の中で形成できるはずだ。人はしばしば、起きてしまったからの解釈に熱中してしまうところがある。しかし、そういう現象がしばしばあることを理解したら、そうならない工夫の関係づくりが出来るはずなのだ。これは相手ばかりに任せる問題でも、責任を問う問題でもない。

そうでなければ、人は用心深くなればなるほど孤立するしかない。深く関わらなければ、親密間暴力のような定義にはまる状況は成立しない。それを望んでいる人はいないだろうから、結果として世の中にDVの訴えは繰り返されてしまう事になるのだろう。

誰が悪いかの問題ではなく、どうすれば良いのかを考える課題にすることこそが、親密間暴力解決への道筋だと思う。

十一 パワー ④『暴力』

暴力

昨今、家族と暴力というと、配偶者間暴力と児童虐待が思い浮かぶ。加えて、高齢者や障害者を抱え、介護を一身に引き受けたところでの暴力行為も広く知られてきた。これらを受けて、児童虐待防止法、高齢者虐待防止法、障害者虐待防止法が定められた。

更に、耳にすることが増えたのが、長期引きこもり青年の家族間での暴力である。中・高年化している引きこもり者と高齢化している保護者の関係は、ままならない現実の先細り感から、双方が追い詰められ、時として双方向の暴力の場と化す。

いかなる暴力も許されないとか、体罰は容認すべきではないという意見は正しい。しかしそう述べているだけでは、主張でも何でもない。戦争が一部の人間によって行われていて、市民は誰もが平和を望んでいる、などと言っているだけでは責任が果たせていないのと同じである。

人類が始まって以来、戦を経験せずに生きられた時代や人が希である事実を見過ごすべきではない。団塊世代以降、たまたま直接的戦争行為のない日本で、生まれて育った幸運に無自覚なまま、口先だけで非暴力を語ってはならない。人が暴力や、不幸への指向性を内在せずに生息したことはない。

私は暴力など行使しないと、安易に言い切ってしまう人は、歴史にも、人間である己にも、洞察力を欠いている。実際に今あるかどうかではなく、人間はずっとそのようにあって、私たちが、それと一線を画するようない、別物として暮らしていることはないこと

は忘れない方がよい。

おそらく、大多数の人々の心の内に、平和を求める願いが無いわけではなく、「誰もが安心と安全を求めている」というメッセージへの共感がないわけでもない。

それにもかかわらず、人は争いを止めたことはなく、更に新たな紛争や諍いが起こる。そして主張の対立と、対立状況打開の手段としてしばしば暴力は登場してしまう。

だから不幸なことが何も起きないユートピアを目標だなどと思誤ってはならない。絵空事は社会システムの到達目標にはなり得ない。

家族の中の暴力

親密関係間の争いにとって、暴力は必然ではない。諍いのない家族はないが、暴力のある家族とない家族には分かれる。

ここでパワーのひとつとして「暴力」をとりあげるのは、被害者側からの訴えによる家族内事件の問題認識からではない。家族の構造的要素のひとつであるパワーというキーワードに照らして、「暴力」を考えると、そのメカニズムについて、手がかりが掴みやすいのではないかと考えるからである。

構造的家族療法のキー概念として、境界、サブシステム、パワーの三つを述べてきた。そのパワーの中の下位キーワードとして位置付く「暴力」である。

パワーの構成要素として、「決定」、「コントロール」、「金」、そして「暴力」と並べた。それぞれ随分違ったレベルのものであるが、家族システムの中における「チカラ」と断ったところで、社会システムも視野に入れながら論じた「家族の中の暴力」である。

学習

暴力は学習とその結果の行動化だとよく言う。確かに殴る、殴られるの頻発する家族や小集団がある。

体育会系の部活に一時まで頻繁に見られたしごきや制裁はこれだろう。先輩から引き継がれ、やられた後輩が翌年には加害側になっていく。そしてそこには、その結果、優勝できたとか、部内が引き締まったなどの成果報告が付いている。

殴られた者が「有り難うございました！」と叫ぶ図も、あちこちで見たパターンである。果たして本当に暴力によって手にした成果があるのか、引き締まった精神があるのか、その証明は難しい。しかしその小集団構成要員がみんなでそう言えばそうだという物語になる。

体罰容認の学校教育文化も長い歴史を持っている。むろん、効果があるかどうかと、体罰を容認するかどうかは別の話である。

効果がないのなら殴ることに意味はないが、意味があるなら殴っても良い！と言い切れる人は少ない。なのに、何となくの体罰容認が漂うのは、どこにその根拠を担保しているのだろう。

ずっと以前、耳にしたK市内の中学校の話だ。体罰も辞さない体育会系のマッちょ教師がいた。校内暴力の話題が全国で沸騰していた時代にもかかわらず、彼のいる中学校は落ち着いていた。

問題生徒は火種の小さい内に、マッちょ教師を中心としたチームが強力にコントロールしていた。体罰もかなりはっきり使われていた。やんちゃな中学生達の親からも、同意を得てのことだった。周辺中学校の軒並みの荒れ具合を耳にしていた一般生徒

の親たちも、教員仲間也大歓迎だった。

その後、彼は他の荒れた中学校の校内暴力対策要員に請われて転勤していった。彼ひとりだけの成果ではなかったから、その後も中学校は安泰かに思えた。

ところが翌春、中学1年生とはとても思えないような大柄の生徒が転入学してきた。小学校時代から様々な暴力事象の噂のある子だった。教員集団に体力で対抗できそうな者はなかった。

以前ならトラブルが起きると、マッちょ教員の所に駆け込んで対応して貰っていた女性教員が不安になった。そして、体罰も辞さずで名の知れていた中学校は、大きな方向転換をした。「体罰は一切禁止。根気強く話し合いで指導する」というのである。

耳にした周辺校の教師達は一様に、体力で勝てない生徒が入学したら、体罰禁止ってどういう方針転換？と、冷ややかに語った。

確かにだらしない話だと思うが、こういう力学は、しばしば我々の社会にみられる。

家族もまったく同じである。父親の鉄拳制裁は愛の鞭、そう定義しているだけでは不十分だ。押さえ込むことはできたかもしれないが、けっして良くは育たず、やがて父親をしのぐ体格になると、仕返しのように家庭内暴力が始まったなどと聞かされることが少なくない。

暴力は短期的抑圧効果は持つが、長期的に見た場合、しばしば事後処理の難しい学習効果をもたらしてしまう。成人した息子を恐れながら暮らす老親などという逆転劇を見ることも少なくない。

被害の集中化

又、暴力は関係の間の産物だともいう。殴る人はしばしば殴るし、殴られる人もしばしば同じ目にあう。

そんな馬鹿なことが・・・と思うが、確かに殴り役、殴られ役の、役割固定の存在を否定できない。

これも随分前の記憶になったが、全く理不尽な暴力被害を、赤の他人から受けた女性と同席した。一同驚いたし、その後の対応では、私もささやかながら役目を果たすことになった。

彼女のショックも癒えて数年が経ったころ、思いがけない報告を受けることになった。彼女が通り魔事件の被害者になったというのである。またもや関係のない相手からの理不尽な暴力被害だった。幸い命に別状はなかったが、ショックは大きく、二度目の被害からの立ち直りは、非常に困難なことになった。

この話を聞いた私は、飲み込みがたい嫌な感じがわき上がって消えなかった。暴力被害者に責任などあるはずがない。二度とも、全く関係の産物などではない。私が同席目撃した最初の被害の方がまだ、加害者の姿が見えているだけ不気味ではなかったし、何が起きたのかを、場と関係について思案もできた。二度目の事件は全く酷い話だった。

振り返りながらこの話していたある場所で、「全く不合理な話だけれど、そういう被害が、集中してしまう人があるのは事実だ」と語るのを聞いて、自分も考えたことがあった着想とすりあわせた。

被害者にも落ち度があるなどと言いたいのでは断じてない。ただ被害が繰り返された事実を当事者は、もっと人間行動科学的に分析、理解しなければならないのではないかと思った。

被害者は被害を重ねたいなどとは、さらさら思っていない。当たり前である。だから、被害者が悪いわけではない。あらためるべきは加害者や、加害容認的な社会である。まったくその通りだが、そう言ってい

るだけで気が済んでいていいのだろうか？

通り魔事件や社会システムが相手では、個人のできる努力には限りがあるだろう。しかし私はここで、家族の学習行動パターンについて触れておきたい。

面接室の暴力

家族合同の面接を三〇分ばかり行ったところで、いったん休憩をして後半につなげると伝えてセラピストは部屋を出た。

通常は家族にも別室で待って貰って、再会と共に再入室して貰う。しかしこの日、いつも待合室に使う部屋が詰まっていた。そこで面接室でそのまま家族には待って貰うことになった。

部屋にはビデオカメラが設置され、面接が録画されていることは伝えてあった。加えて、ワンサイドミラーの背後で、担当ケースワーカーやスーパーヴァイザーが面接を観ていることも伝えてあった。だから父親がそのことを承知していなかったわけではない。

家族以外の人と同席する場での息子の態度に、父親がイライラしているのは感じていた。セラピストが退室した直後、父親が立ち上がって息子の腕を掴んで部屋の隅に連れて行った。そこはビデオカメラからは死角になるところだった。

「いい加減にしろ！」と叫ぶといきなり息子を殴った。カメラは死角だったが、マジックミラー越しには丸見えの場所での息子への暴力に観察室は騒然とした。

繰り返されるようなら飛び込んでいかねばならない。しかし、うずくまってしまった息子に父親は強い戒めの言葉を吐いてトイレに立った。

強い憤りの中でもカメラを避ける判断は実行された。しかし、ミラー越しに見ていると認識しているはずの私たちの存在(ひょっ

とすると、私達も別室で面接後半の打ち合わせをしていると思っていたのか)は、抑止力を持ち得なかった。

誘発要因

暴力は対象の弱さが誘因となって行動化される面が少なくない。相手が対抗力を持っているとわかることで、抑止力の働く面を否定できない。

S. ミニューチンの「家族と家族療法」の中にこんな話がある。

檻の中に三匹のチンパンジーを入れて、その一匹だけにストレスを与える。

一番強いのにストレスをかけると、周囲に当たり散らし、暴力的になる。二番目のにストレスをかけると、自分より弱い一匹にその発散行動は集中する。そして一番弱いのにストレスをかけると、自傷行動にはしる。

この実験から、暴力誘発要因がストレスであることは言えるが、それがどこに向かうかは、その場の力関係に左右されていることが分かる。

思春期、青年期の家庭内暴力、カップルのDV被害の多くは、親密さの中にあるパワーバランスを了解した上で、繰り返されている行動だと言える。

修復へ

「家族再統合」は、子ども虐待のことが大問題になった日本で、急速に大きなテーマになった。しかし私は、自分の実体験に則して、理解、説明すれば可能というモノではないと考えている。だからメソッドが喧伝されてもうかうか近づかない。今日の家族再

統合のメカニズムも、成果も詳細には知らない。このスタンスで在り続けるのが私の現状認識ということだ。

家族間の行動や関係の力動は、生活習慣に近いところがあって、そう簡単に変化するものではない。無論、プログラムやエクササイズを通して、何かが変化することが全くないとは思わない。しかし、それによって人が認識を改めるのはとても難しいことだと思う。

暴力や腕力による支配は、相手が対抗手段を手に入れたとたんに逆転する可能性を秘めている。

分かり切ったことのように思うかも知れないが、そういう事件が少なくない。加害者の常識と被害者の常識には隔たりが大きい。それくらいのことで、そんなことまでするだろうか・・・は鈍感な加害側の視線になっている。

最大の暴力といえば戦争だが、今、世界中の歴史経過のある紛争が、新たな火勢を増していて、本当に危うい。次の事態への展開誘発要因いっぱいに対峙する姿が、暴力そのものだ。

加害側は済めば忘れてしまうが、被害側は蓄積させる。これを理解するのは難しくはないが、いつも自分の中で持ち続けるのは難しい。

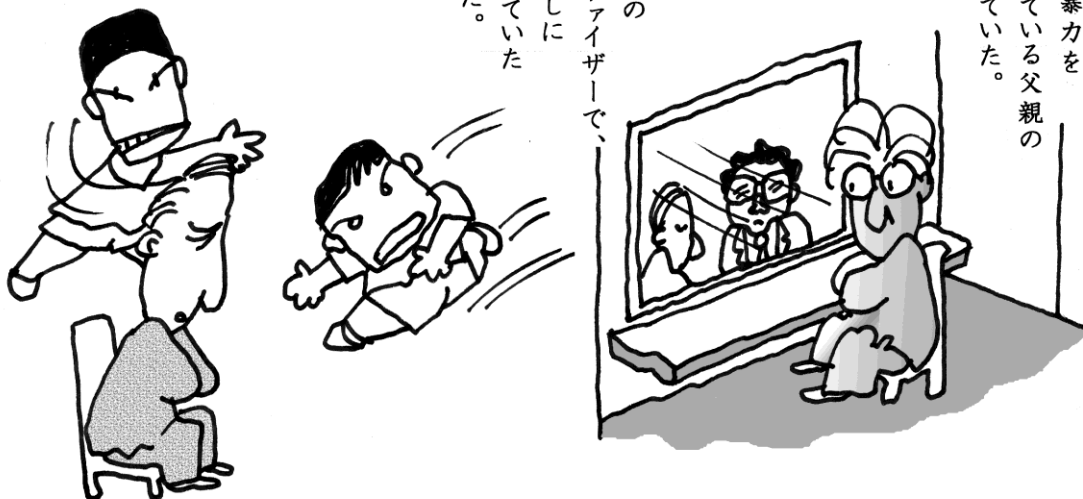
大量破壊兵器の存在など、事実無根に攻撃してしまったイラクのその後が作った世界を見ると、暴力の持つ力の絶大さと思う。

常人はついつい、自分をニュートラルな立場にいたいと思いきや、思っている。しかし、大きな力の前で、どこにも属さない自分を確保して、安心したがるのは既に暴力に踏み込まれている。Noと言わない人間はYesと言っているのだと深く噛みしめて今の時代を考えたい。

息子達の暴力を受け続けている父親の面接を見ていた。

家族面接のスーパーヴァイザーで、ミラー越しに観察をしていた時のことだ。

中2と小6の男児が連日のように父親に乱暴しているという。



第122話

贖罪

in the shade of family tree

木陰の物語



団 士郎

父の被害は酷いもので、肋骨のヒビは一、二度の事ではなかった。



仕事帰りに面接に来るのだが、椅子に座っていることさえ辛そうだった。

話によると、帰宅すると深夜まで、連日のように暴行が繰り返されているらしい。



帰宅が遅ければ、その時間も短縮できるだろうと、映画でも観て帰ったかどうかと担当者は話していた。



しかし父親は
弱々しく笑いながら、
ありがとうございます
と言って帰宅した。



だんだん事情が
分かってきた。

きっかけは
妻の病死だった。



体調不良を
訴える妻を、
彼なりに
気遣っては
いたのだが、
仕事に追われていた。

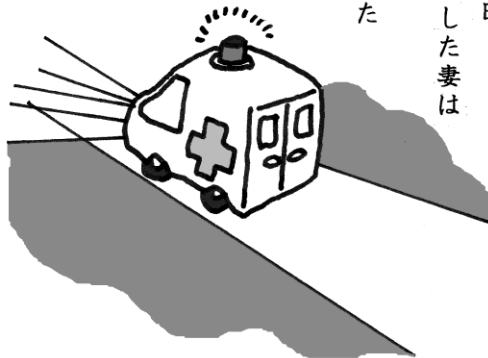


受診をすすめても腰の重い妻に、
それ以上は聞けなかった。

病院
行け...



そんなある日、
体調が急変した妻は
救急車で
運び込まれた
病院で、
あっけなく
亡くなった。



誰も想像しなかった
驚きだった。



そして身近な人々の怒りは
彼に向いた。

妻の両親は葬儀の場で、



と深い悲しみと共に
怒りをあらわにした。

40歳にもならない一人娘の
いきなりの
訃報に触れた
両親の悲しみは
想像に難くない。

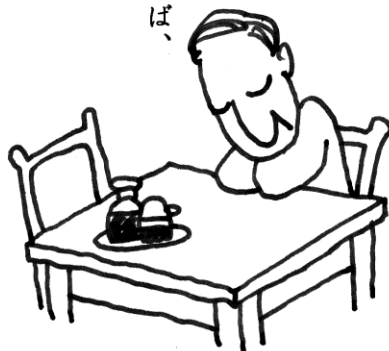


「今後、一切関わりたくない」と絶縁宣言し、遺骨も持っていつてしまった。



彼自身、何故もつと強く受診をすすめなかったのかと己を責めた。

無理矢理にでも病院に連れて行けば、事態は違っただろうと思った。



しばらくして子ども達二人が、

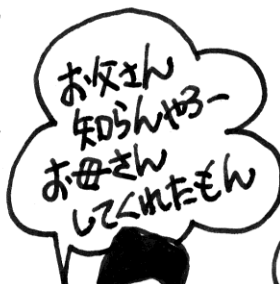
と言い始めた。



父の後悔は、子ども達によいことはもたらさなかった。



やがてあれこれ、ワガママをぶつけ始めた。



幼くして母を

亡くさせて

しまった二人に、

父親は

済まないと

謝罪した。

しかしこれは事態を悪循環に導くことになった。



学校を急げ、夜更かししているのを、たしなめると、母親のことを持ち出して、怒りをぶつけた。

お父さん云々

今日お父さん



手当たり次第にものが飛び、そのうち兄は二段ベッドの上から、跳び蹴りを食らわすようになっていった。



しかし父は、
それをたしなめる
気持ちになれなかった。

自分を傷つけることで、
贖罪が叶うかのような
態度をとり続けた。

弟も手を出す
ようになり、
父親は
ぼろぼろに
なりながらも
仕事を続けた。



事態に変化が生まれたのは、
隣家の住人の親切な
働きかけだった。

学校にも行かず、
昼間家にいる兄弟を、
あれこれ世話し始めたのだ。



やがて
お裾分け
と言って、
自宅の夕飯に
用意したものを、
男三人の世帯に
届けてくれる
ようになった。

隣のおばちゃんの
心遣いや心配には、
兄弟が素直に
応じるようになった。

こんな女神が
登場することが
あるのだ...と、
人々の繋がりと
暖かさが胸にしみた。



おわりに

家族の構造理論を掲げて、今の家族を考えし続けてきた。これからも可能な限り続けることになるだろう。

変化は事象の必然である。家族も変化するのは当然だ。もし変わらずあるとしたら、変化しない事を目的にした強い動機が内在しているということだろう。それは本来、目的にされるものではないから、必ず変化は起きるし、変化を起こすことはできる。課題はその方法である。